



陸の水

====No.78====

日本陸水学会東海支部会

ニュースレター（2018年3月31日）

発行：日本陸水学会東海支部会

連絡先：〒501-6021 岐阜県各務原市

川島笠田町官有地無番地

国立研究開発法人土木研究所

自然共生研究センター

末吉 正尚

Tel:0586-89-6036、Fax: 0586-89-6039

E-mail: m-sueyoshi55@pwri.go.jp

目次

- 2017年度「第20回研究発表会」の報告（p. 1～3）
- 2017年度「第21回総会」の報告（p. 4～8）
- 濁川水環境に関する調査報告会開催の報告（p. 9～11）
- 陸の水論文集発行の延期に関するお知らせ（p. 12）
- お知らせ 会費納入（p. 13）
- 2018年度「研究助成」の募集案内（p. 14）
- 編集後記（p.15）

2017年度「第20回研究発表会」の報告

「初の発表会参加～第20回研究発表会に参加して」

末吉正尚（土木研究所自然共生研究センター）

日時：2018年2月17（土）-18日（日）

場所：木曽町会館木曽郡民会館

2018年2月17日～18日にかけて、長野県と岐阜県にまたがる御嶽山麓の木曽町において、陸水学会東海支部会第20回研究発表会が行われました。初日は午後から学生を中心とした研究発表が行われ、二日目は午前研究発表、午後京都大学木曽生物学研究所を訪問しました。発表件数は30題で、昨年度の35題には及びませんでしたが、ここ5年間でも2番目の多さとなりました。特に学生による発表は20題にものぼり、若い力による今後の支部会の盛り上がり期待できる会となりました。

私は今回が初めての参加になりましたが、発表のフィールドは湖沼、湿地、河川、森林と多岐にわたり、陸水環境や陸水生物だけでなく人を対象とした研究もあり、どの研究も意義のある興味深い内容でした。学生の研究発表に対しては、一般参加者による優秀賞の投票も行われました。皆さんしっかり準備された発表で、分かりやすいスライドに適切な時間配分と選ぶのが難しい研究ばかりでした。その中で、最優秀賞・優秀賞に選ばれたのは、中部大学の岡田麻衣さん（最優秀賞）、名城大学の長崎佑弥さん、濱島翼さん、山本京佳さん（優秀賞）の4名でした（写真1）。岡田麻衣さんの発表は、天竜川で行われた河床清掃実験が付着藻類に与える影響を評価したものでした。ダム下流では、しばしばシルトの堆積や攪乱の低下によって、アユの餌として重要な藻類の質の低下が起こります。



写真1. 最優秀賞・優秀賞の受賞者4名（左から名城大学：山本京佳さん、長崎佑弥さん、濱島翼さん、中部大学：岡田麻衣さん）

岡田さんの研究では、放水を河床に吹き付けることでシルトと藻類を実験的に洗い流し、その後の藻類の新たな遷移と定着が促される結果が示されていました。また、一度河床清掃を行うと、アユが生育した藻類を食むことで常に遷移・更新が維持されるというフィードバック効果もみられるということでした。濱島さんは、実験的に魚道を模した水路を作成し、アメリカザリガニと魚類3種の遡上能力を比較していました。日本国内の多くの水田や農水路には落差が存在し、水生生物の移動を妨げています。水田魚道はこの移動障害を解消するための有効な手法として注目されていますが、一方で外来種の移動も促す可能性があります。魚道設置による負の影響を検証した事例は少なく、濱島さんはアメリカザリガニが魚類よりもより遡上達成率が高いことを示していました。長崎さんと山本さんはともにキャッチ&リリース区（CR区）と呼ばれる持続可能な遊漁資源管理が釣り人の満足度やイワナ個体群自体に与える影響を調べていました。長崎さんの発表によると、CR区では一般遊漁区に比べてイワナの個体数密度が高く、平均体長が大きくなるようです。そして山本さんの発表では、その個体群の変化に対応して、CR区では「よく釣れる」、「魚が大きい」などの理由から釣り人のリピーター率・満足度が高くなる結果が示されていました。受賞者4名の発表はいずれも、より応用を意識した研究となっていました。十分なデータ量と適切な考察によって、研究の有効性が聴者に分かりやすく伝わってきました。今回は、受賞した学生への表彰のみとなってしまいましたが、次回以降は受賞者からの感想ももらえるようにしていきたいと思います。

発表会後は、現地観察会となりました。1日目は夕方から雪も降っていましたが、2日目は雲一つない快晴でした（写真2）。木曽郡民会館をでて木曽川沿いを歩き（写真3）、木曽福島駅方面に向かうこと約20分、京都大学木曽生物学研究所に到着しました（写真4）。



写真2. 木曽郡民会館と快晴の青空



写真3. 木曽町を流れる木曽川



写真4. 京都大学木曽生物学研究所



写真5. 木曽生物学研究所前での集合写真

木曽生物学研究所は大正15年に当時の動物学教室動物生理生態学講座の川村多實二教授らによって、溪流と森林の生物調査のための基地として計画され、創立されました（京都大学HP <http://www.sci.kyoto-u.ac.jp/ja/divisions/facilities/kiso-biol.html>より引用）。溪流昆虫の生態学研究の第一人者である可児藤吉らも同研究所を基地として、研究・調査に励んでいました。建物自体は昭和63年に全面改築されたようですが、当時の研究日誌や標本など、日本の陸水研究を築き上げてきた方々の歴史を垣間見ることができました。各々自由に宿舎や森林を散策したあと、集合写真（写真5）を撮影して本観察会は終了しました。

来年度の開催地や現地観察会の継続に関しては、参加者の方からもいくつかご意見を頂いております。皆様が楽しく、意義のある会にできるようにしていきたいと思っておりますので、ご意見のある方はいつでもご連絡ください。東海支部会を盛り上げるために、今後とも皆様からのご協力をよろしくお願いいたします。最後になりますが、宿や会場の予約をして頂いた新実さん、プログラムの調整や進行をして頂いた田代さん、木曽生物学研究所との調整をして頂いた野崎さん、そして会場設営をして頂いた役員および参加者の皆様に心から感謝いたします。

2017年度「第21回総会」の報告

日時：2018年2月18日

開催地：木曽町会館木曽郡民会館

第21回陸水学会東海支部会総会が、2月18日の研究発表会終了後開催されました。まず、2017年度事業実施報告に先立ち、研究発表会の学生発表者を対象に最優秀賞1名・優秀賞3名の表彰を行いました。その後、担当者から事業・会計等について説明があり、審議・承認されました。

総会之次第

1. 会長挨拶 井上祥一郎会長
2. 第20回研究発表会優秀発表者の発表・表彰（田代事業担当）

◆ 最優秀賞

「天竜川（静岡県浜松市）の付着藻類の現状とその対策—アユ漁再生のための河床清掃実験—」

*岡田真衣（中部大・応生）・喜多村雄一（電源開発）・村上哲生（中部大・応生）

◆ 優秀賞

「養殖魚の放流に頼らないイワナの持続的な遊漁資源管理」

*長崎佑弥（名城大院・理工）・山本京佳・谷口義則（名城大・理工）

「簡易魚道における魚類およびアメリカザリガニの遡上能力の相違」

*濱島翼（名城大院・理工）・富田健人・鈴木杏奈・谷口義則（名城大・理工）

「岐阜県石徹白川水系における遊漁資源管理：釣り人アンケートにもとづく考察」

*山本京佳（名城大・理工）・長崎佑弥・谷口義則（名城大院・理工）

3. 議長の選出 八木会員

4. 報告事項

- 1) 2017年度活動報告（田代事業担当）

今年度の事業実施状況を次の表にて報告し、承認されました。

活動項目	当初計画	実施状況
ニュースレター 発行	年間3号	2016年6月(No.75)、7月(No.76)、12月(No.77)に発行。2018年3月にNo.78を発行予定。 ※No.75は昨年度末発行予定が遅延。電子版で配信。
論文集発行	年間1号	陸の水第八論文集(No.80を想定)は2018年夏季頃に発行予定。
サマースクール	夏1回実施	2017年8月26日、27日に表浜海岸で実施。 ※陸の水No.77に報告記事掲載

談話会	年 2 回実施	■第30回談話会 6/23（金） 18：30～20：00 末吉正尚氏（土研共生セ）：変動する環境下で生息場の複雑さがもつ意味を考える（陸の水No. 76に報告） ■第31回談話会 10/30（月） 18：00～20：00 角皆 潤氏（名大院環境）：自然界の三酸素同位体異常を指標に用いた河川・湖沼の窒素循環定量化（陸の水No. 77に報告） ※場所：愛知工業大学本山キャンパス ※土木学会継続教育（CPD）制度（1.5単位）
見学会	年 1 回実施	■研究発表会・総会終了後に予定～木曽町
助成金	15 万円以内 で 5 件まで	5 件の申請有。厳正な審査の結果、今回は 4 件に対し総額 15 万円の助成を行うことに決定。 ※陸の水 No. 77 に報告記事掲載
広報・学会公式 HP		http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/ に開設。活動状況・予定など随時更新中。 Facebook（仮）による広報。ML の運用開始。
総会・研究発表 会	2 月に実施	2018 年 2 月 17、18 日に実施（長野県木曽町）。
教科書販売	『身近な水 の環境科学・ 測定実習編』	1 冊定価 2,700 円（税別）を 2,500 円で販売。
学生発表賞		研究発表会終了後に、優秀発表者を表彰。 ※前回研究発表会（対象者 25 名）では、後日、最優秀発表賞 3 名、優秀発表賞 4 名に賞状発送。
幹事会の開催		幹事会の会合：4 回、メール会議：適宜
他団体との交流		応用生態工学会名古屋、ため池の自然研究会の協賛を得て、2 回の談話会（前述）を実施

2）2017 年度環境影響調査報告（松本社会貢献担当、代理 田代事業担当）

3）次の研究集会や報告会で御嶽山における調査成果を発表しました。

・ELR2017 研究集会（9/23（土）13:30～15:30）

「火山地域における「自然共生」のために ELR でできること」

・日本陸水学会第 82 回大会課題講演（9/29（金）9:00-10:30）

「火山と陸水」

・第 1 回調査報告会（2/19（月）9:30～11:30）

「御嶽山麓・濁川の生きものと水環境」

4）2017 年度論文集の編集状況（野崎編集委員長）

陸の水論文集は毎年度発行していましたが、支部会の財政状況により次年度（2018 年度）分と合併号とすることを報告し、承認されました。2017 年度の発行見送りに関しては、本号にて詳細な経緯を報告しております。

5) 2017 年度会計報告（大八木会計担当）

2017 年の収支の状況を以下の通り報告し、承認されました。

2017 年度予算決算書（2017.01.01～2017.12.31）

[収入]

費目	2017 年度予算	2017 年度決算	備考
前年度繰越金	124,936	124,936	
会費収入	174,000	147,000	一般 54 名（過年度分を含む）
過年度分会費収入	50,000	0	
雑収入	409,500	358,878	論文集別刷代 350,398 円、教科書 2 冊 6,480 円
寄付金	0	92,555	
その他	10	2	
総計	758,446	723,371	

[支出]

費目	2017 年度予算	2017 年度決算	備考
郵送料	15,000	5,995	庶務・会計に係る通信費
ニュースレター発行費	35,000	140	陸の水の送料
要旨印刷費	25,000	12,000	第 19 回研究発表会要旨集製本謝金
事業費	250,000	195,834	総会等補助（見学補助、大会文具類、講師謝礼）
論文集発行費	400,000	69,687	論文集印刷代、送料
雑費	10,000	1,944	振込み手数料など
予備費	23,446	22,060	幹事交通費等
総計	758,446	307,660	次年度繰越金 415,711 円

6) 2017 年度会計監査報告（新実会計監査）

決算報告書について新実会計監査より監査結果が報告され、承認されました。

5. 審議事項

1) 2018 年度事業計画（田代事業担当）

以下の通り報告し、承認されました。

2018 年度事業計画

1. 陸の水第八論文集（No.80）の発行

2. ニュースレター「陸の水」の発行：年間 3 号

7 月 (No.79)、12 月 (No.81)、3 月 (No.82)

3. サマースクールの開催 (8 月)

4. 談話会の開催：年間 2 回 (時期未定)

※土木学会継続教育 (CPD) 制度のプログラム (1.5 単位) として実施予定

※応用生態工学会名古屋、ため池の自然研究会の協賛

5. 見学会の開催：年間 1 回 (時期未定)

6. 総会・研究発表会の開催

7. 一般研究助成 (基本的に助成金 15 万円以内。助成金申請は 5 万円まで)

8. 学生発表賞の授与 (研究発表会にて優秀発表者を表彰)

9. 活動報告 (HP の更新、ML・Facebook、研究発表会の要旨の公開)

※Facebook を HP と連動させて活用してく。

10. 「陸の水」論文集・教科書販売：

※論文集は 2,000 円、

※教科書『身近な水の環境科学・測定実習編』定価 2,700 円 (税別) と『身近な水の環境科学・源流から干潟まで』定価 2,600 円 (税別)

※教科書の内容が古くなってきたため、改訂を検討。

11. 社会貢献 (2015 年からの継続として環境影響調査を実施)

12. 他学会・他の研究会との交流および共催・協力行事の実施

13. 幹事会の開催

など

2) 次期役員 (案) (井上会長)

以下の通り報告し、承認されました。

新執行部について

会長	：井上 祥一郎 (株式会社名邦テクノ)	：留任 2 年目
副会長	：内田 臣一 (愛知工業大学)	：留任 2 年目
庶務担当幹事	：須田 ひろ実 (株式会社ニック環境システム)	：留任 2 年目
会計担当幹事	：大八木 麻希 (四日市大学)	：留任 3 年目
事業担当幹事	：田代 喬 (名古屋大学)	：留任 2 年目
社会貢献担当幹事	：松本 嘉孝 (豊田工業高等専門学校)	：留任 2 年目
陸の水担当幹事	：末吉 正尚 (土木研究所)	：留任 2 年目
助成金担当幹事	：戸田 三津夫 (静岡大学)	：留任 2 年目
広報 HP 担当幹事	：吉成 暁 (いであ株式会社)	：留任 3 年目
会計監査	：新実 智嗣 (株式会社水地盤研究所)	：留任 2 年目
論文集編集委員長	：野崎 健太郎 (椙山女学園大学)	：留任

※2 年の任期のところ、大八木幹事、吉成幹事には 1 年延長しての担当を快諾いただいた。

※今後、多数の役員が任期満了となるため、後任役員の自薦・他薦を募集したい。

3) 2018 年度予算案 (大八木会計担当)

2018 年の予算案を以下の通り報告し、承認されました。

2018 年度予算案 (2018.01.01～2018.12.31)

[収入]

費目	2018 年度予算	備考
前年度繰越金	415,711	
当年度会費収入	169,000	会員 87 (一般会員 78,家族会員 2,学生 6,団体 1) ※一般会員の中に,学生会員および家族会員を含む
雑収入	409,500	論文集・教科書販売 (50,000 円),別刷り代 (100,000 円+259,500 円 (No.80))
寄付金	0	
その他	5	
総計	994,216	

[支出]

費目	2018 年度予算	備考
郵送料	10,000	庶務・会計に係る通信費
ニュースレター発行費	30,000	陸の水の送料,封筒・切手代など
事業費	230,000	総会等補助,研究助成,談話会等の講師謝礼,社会貢献
広報費	20,000	インターネット,土木学会継続教育 (CPD) 制度プログラム
論文集発行費	400,000	論文集印刷代,送料
雑費	5,000	振込み手数料など
その他	299,216	幹事会交通費等
総計	994,216	

4) 「陸の水」論文集 2018 年の発行 (野崎編集委員長)

2018 年度に「陸の水」論文集 (No. 80 を予定) が発行される旨が報告され、承認されました。

5) 一般研究助成 (戸田助成金担当)

1 件あたりの上限額を 5 万、総額を 15 万、旅費の割合を 50%未満へと変更した旨が報告され、承認されました。

6) 本会の事務局分担について

日本陸水学会本会の事務局担当が東海支部に要請があり、引き受ける方向で検討中。

7) 議長の解任

8) その他連絡事項

濁川水環境に関する調査報告会開催の報告

「林野庁木曽森林管理署にて御嶽調査について報告してきました！！」

田代喬（名古屋大学減災連携研究センター）

日本陸水学会東海支部会研究班 第1回調査報告会

「御嶽山麓・濁川の生きものと水環境

～酸性水、崩壊土砂、火山噴出物とそれに適応する水生生物の営み～」

日 時：2018年2月19日（月）9:30～11:30

場 所：林野庁木曽森林管理署

内 容：

研究報告1 「御嶽山南麓河川の水質分布特性について／松本嘉孝（豊田工専）」

研究報告2 「濁川の強酸性水とその付着藻への影響／野崎健太郎（椋山女学園大学）」

研究報告3 「濁川水系のイワナの局所的な分布／小野田幸生（土木研究所）」

研究報告4 「2014年9月噴火後の水生昆虫群集の回復／田代喬（名古屋大学）」

紹 介 「濁川（第65号）復旧治山工事施工現場の河床状況について／

林野庁木曽森林管理署治山グループ」

出席者：林野庁木曽森林管理署署員、長野県木曽建設事務所、木曽町役場三岳支所などの関係者、新聞記者など（約40名）

著者らは2014年9月の御嶽山噴火を受け、その水域生態系に及ぼす影響を明らかにすることを目的に、同年12月以降、調査研究活動を継続してきました。2015年度以降、本活動は当支部会の公認を得て、社会貢献を旨とする研究担当幹事（2015～2016年度：田代、2017年度～：松本）が研究班を組織してその任に当たっています。現在までのところ、水源地環境センターのWEC応用生態研究助成（2015～2016年度・御嶽山噴火による火山灰の流入が河川生物の生息状況と生息場所改変に及ぼす影響の解析（代表：野崎）／2017～2018年度・御嶽山噴火により攪乱されたダム湖流入河川の水質変遷と河川生物の応答関係の把握（代表：松本））による研究費などを活用して研究を実施してきました。本調査研究成果の一端は、2015年4月の第27回東海陸水談話会、第18～20回の研究発表会と陸の水第七論文集（Vol. 74）に掲載された御嶽山特集（5編で構成）のほか、2017年9月のELR2017（応用生態工学会・日本景観生態学会・日本緑化工学会の合同大会）での研究集会「火山地域の自然共生のためにELRでできること」、日本陸水学会第82回大会の課題講演「火山と陸水」などで報告しており、来る2018年4月のThe 8th EAFES（東アジア生態学会連合国際大会）でも”Aquatic ecosystem of inorganic acidification in Japanese volcanic area - the Case Study in Mt. Ontake erupted in 2014 - “と題する企画セッションが採択され、現在も尚、開催に向けた準備を進めているところです。

当研究班の主な調査研究フィールドである濁川水系については、その多くが噴火口を有する地獄谷に発し、王滝川に注ぐ過程のほとんどが御嶽山南麓の国有林内にあります。そのことから、2016年秋季以降、研究班では林野庁木曽森林管理署より入林許可を得てその活動を展開してきました。濁川は酸性河川として知られ、1989年の御嶽崩れ、2014年の噴火の影響を大きく受けながらも、林野庁木曽森林管理署の治山事業により整備されて現在に至っています。本報告会は、前記したELR2017の研究集会において講師として招へ

いした梅田英孝氏（林野庁木曽森林管理署統括治山技術官）からの依頼にもとづき、入林調査の成果報告の趣旨を付加して企画・構成したものです。そのきっかけは、御嶽山噴火以降、現場の濁川を観察し続けてきた梅田氏が、同集会での野崎さんの研究発表を聞くに及び、強酸性の濁川の水中で生育し光合成を行う付着藻に興味を示されたところにあります。本報告会では、これまでの約3年間にわたる調査で得られた成果にもとづき、火山山麓の濁川水系において成立してきた特殊な陸水環境・生態系を紹介し、その集水域を管轄する木曽森林管理署の方々に崩壊や噴火、治山事業による水域生態系への影響について考えていただくことを意図しました（チラシ参照）。当日は、管理署と周辺機関に勤務される方々、そして、新聞各社の木曽地域支局の記者の方々、約40名にご出席いただきました。

各研究担当からの報告内容については、直前の研究発表会など別の機会ですれぞれに紹介されていますので割愛しますが、ほとんどの出席された方々にとっては、日常業務とおよそかけ離れた話題にもかかわらず真剣に聴講くださり、質問くださいました。また、研究報告後には、梅田氏自ら、現地で取材してきたと思しき、濁川治山工事現場周辺の河床状況に関する疑問が投げかけられ、専門分野の合致する担当者が応じるといった、Q&A方式での紹介コーナーが設けられました。ここで扱った事象は、濁川における赤褐色や白褐色の河床、たまりに生じる緑色藻類、白濁・泡沫を生じる河川水など、い

ずれも事前に問合せいただき、研究班内で情報・意見交換しメールで回答済みのものでありましたが、現場を知っている関係者が大勢参加されている場での公開討論となることで、興味が掻き立てられ、情報共有が進むように感じられました。本報告会を企画・調整くだ



「御嶽山噴火が水域生態系に及ぼす影響」を明らかにすることを目的に、日本陸水学会東海支部会研究班が最近2年間にわたり、木曽森林管理署管轄国有林内に実施した調査研究[※]の成果をご紹介します。

（中28水第55-76号、29水第34-40号の入林許可を得て実施しています。）

日本陸水学会東海支部会研究班

第1回調査報告会

「御嶽山麓・濁川の生きものと水環境
～酸性水、崩壊土砂、火山噴出物とそれに
適応する水生生物の営み～」

御嶽山の南山麓に位置する濁川は酸性河川として知られ、1989年の御嶽山噴火の影響を大きく受けながらも、治山事業により整備されて現在に至っています。日本陸水学会東海支部会では、2014年の噴火以降、濁川を含む玉川水系において、付着藻類、水生昆虫、魚類を含む、水環境に関する調査を進めてまいりました。本報告会では、濁川における水生生物分布の現状を踏まえ、崩壊や噴火の影響を推測しつつ、火山山麓に成立してきた特殊な陸水生態系についてみなさんと情報共有し、今後のあるべき姿を考えたいと思います。

日時：2018年2月19日 月
9:30～11:30

場所：林野庁木曽森林管理署

〒399-5604 長野県木曽郡上松町大字正島町1丁目4番地1

<http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/kiso/kankatsukui.html>

主催：日本陸水学会東海支部会研究班
（担当幹事：松本嘉孝／豊田工業高等学校、田代喬／名古屋大学特任教授）
連絡先：〒464-8601 名古屋千種区不老町1番地 名古屋大学減災館401室
田代 喬 Tel. 052-789-4829 E-mail: ttashiro@nagoya-u.jp

研究報告

「御嶽山南麓河川の
水質特性分布について」
松本 嘉孝

「濁川の強酸性水と
その付着藻への影響」
野崎 健太郎

「濁川水系のイワナの
局所的な分布」
小野田 幸生

「2014年9月噴火後の
水生昆虫群集の回復」
田代 喬

※プロフィールは裏面参照

本研究は、WEC応用生態研究助成（一財）水源地環境センター、2015-04、2017-05の助成を受けて実施しています。

第1回調査報告会の広報用チラシ



野崎さんの講演に対する質疑の様子

さった、梅田氏の細やかな工夫には敬服の思いです。さらに予想に反し、中日・信濃毎日・市民タイムスといった各新聞社木曽支局から取材に来られた方々は、最初から最後まで聴講くださり、終了後の取材を経た情報をまとめていただき、おおむね妥当な紹介記事を各紙に掲載くださいました（末尾の【掲載新聞記事など】参照）。

今回の報告会は、長野県木曽町で2月17～18日に実施した当支部会の研究発表会に引き続き、近隣の上松町での開催となったことから、前夜に豊田市から駆け付けた松本さんを除き、担当者一同、束の間のオフを挟んで余裕をもって発表することができました。本報告会を調整いただいた梅田氏には、これ以前にも御嶽山麓で実施の治山整備事業について幾度となく情報提供いただくなど、当研究班の調査研究活動に多大なるご支援をいただいております。また、報告会の冒頭にご挨拶された新津清亮署長とは事前に歓談させていただき、（今年の初夏の）御嶽崩れの崩積土が堆積する伝上川源頭部へのご案内を含め、今後の調査への協力もお約束いただきました。なお、当支部会の井上会長はじめ幹事のみなさまには、本報告会の調整にかこつた研究発表会の木曽町誘致に関する提案を快くお認めいただきました。末筆ながら、関係各位にこの場をお借りして深謝申し上げます。どうもありがとうございました。

御嶽山噴火が水域生態系に及ぼす影響について調査を継続してきた当研究班としては、発足から丸3年が経過し、ようやく成果をまとめることができそうな状況になってきました。今後も学界のみならず、地域社会に向けて研究成果を発信・還元することにより、幾ばくかの社会貢献を果たせればと考えております。支部会員のみなさまにおかれましては、今後とも引き続き、ご理解、ご支援いただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【掲載新聞記事など】

2018年2月20日市民タイムス1面、「濁川の水生昆虫一部回復 研究者グループ御嶽噴火後の調査を報告」。

2018年2月20日中日新聞（地方版）、「濁川の水生昆虫回復傾向 名大特任教授調査 ハエ目など見つかる」。

2018年2月20日信濃毎日新聞、「濁川生態調査を報告 噴火直後、水生昆虫見つからず」。

2018年2月20日信毎web、「濁川の水生昆虫 回復傾向 御嶽山噴火で壊滅的影響」、
<http://www.shinmai.co.jp/news/nagano/20180220/KT180219FTI090024000.php>（2018年3月11日閲覧）。

2018年2月20日市民タイムス【情報】・記事抜粋版、「御嶽山麓・濁川の水生昆虫 噴火後の生息数が回復傾向」、<http://nikou-p.co.jp/cp-bin/wordpress/?p=7355>（2018年3月11日閲覧）。

陸の水論文集発行の延期に関するお知らせ

「陸の水」論文集の発行を 2017 年度は見送りました

野崎健太郎（「陸の水」論文集編集委員長）

「陸の水」論文集（*Rikunomizu: Limnology in Tokai Region of Japan*）の発行は、2017 年度は見送らせて頂きました。これは投稿数が満たなかったためではありません。3 本の論文、そして 2 本の記事が期限通りに投稿され、既に受理になっております。それにもかかわらず、発行を見送ったことを、まず深くお詫び申し上げます。現在、受理された原稿は印刷所に入稿され、初校を作成しております。経緯について、年度末まで報告を怠りましたこと、支部会員の皆様に改めてお詫びする次第です。

発行が遅れている理由は、東海支部会の財政状況によります。当初、この論文集は 10 周年記念誌として企画され、かつての国際陸水学会（SIL）の紀要同様に、数年に一度の発行を計画しておりました。しかしながら、当時の支部会総会で、できる限り、毎年発行すべき、という結論になり、2016 年までは毎年発行して参りました。しかしながら、陸水学会本会と同様に、支部会でも会員数が減少し、現状では 90 名未満です。この規模で毎年論文誌を発行するのは困難になりつつあります。ここ数年は、関係者が必要経費を寄付という形で、あるいは特集号を組む際に外部資金を導入する形で、なるべく支部会財政を圧迫しない様に努力して参りました。

2017 年度も私的な寄付を募り、発行の基盤はつくってききましたが、今一度、今後の方針を総会で議論したく発行を控えてきました。総会では、「印刷の質を落として毎年発行よりは、受理しだい、電子媒体は作成（PDF ファイル）し、ある程度論文が集積されたところで発行という形、すなわち 2～3 年に 1 回の発行で進めていこう」という方針が確認されました。もちろん、今後、会員が増える、あるいは寄付が活発になる、さらに近畿支部会の様に著者に経費負担を求め毎年発行という形が復活する可能性もありますが、今回は 2017-2018 年の合冊で発行します。発行は 6 月頃を想定しております。

なお、投稿は随時受け付けておりますので、編集委員長までお気軽にご相談下さい。地域の生物相、水質の特徴、地形、環境教育、地誌等、幅広い内容に対応させていただきます。支部会員の発表の場として息長く継続していきたいと考えております。

問い合わせ先

野崎健太郎（「陸の水」論文集 2017-2018 年 編集委員長）

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17-3 椋山女学園大学教育学部

電話 052-781-4458（研究室）

E-mail : ken@sugiyama-u.ac.jp

お知らせ 会費納入について

納入方法として、下記「ゆうちょ銀行」への振込、もしくは談話会や研究発表会などでの直接的なお支払いも受け付けております。ゆうちょ口座から通帳かカードで ATM 振込をご利用いただくと手数料無料となります(ATM 送金料金が無料となるサービス期間は現在も継続中)。会費納入状況が不明な場合は事務局までご照会ください。2 年度分の会費が未納の方は、規約に従い、翌年度には自動的に退会となりますのでご承知おきください。その際も、未納会費 2 年分のお支払いをお願いしております。

納入が確認できた会員のみ、論文集を送付することが総会で承認されています。2017 年度は、論文集が発行されなかったため、2018 年度に合併号が送付されます。「陸の水論文集発行の延期に関するお知らせ」にもありますように、会員数の減少に伴い論文集発行の予算確保も難しい状況となっております。毎年度の送付が滞り大変申し訳ありませんが、会員の皆様にも現状にご理解頂き、確実な会費の納入をお願いいたします。退会をご希望の方は、下記「入会及び大会の手続きについて」を参照のうえ確実な手続きをお願いいたします。

<年会費>

一般 2,000 円、学生（大学生以上）1,000 円、高校生以下は無料、
団体 4,000 円、家族 3,000 円

<ゆうちょ銀行からお振込みの場合>

記号：12120-2 番号：73385891

名前：日本陸水学会東海支部会

<他の金融機関からお振込みの場合>

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：二一八（読み ニイチハチ） 店番：218

預金種目：普通預金 口座番号：7338589

カナ氏名（受取人名）：ニホンリクスイガツカイトウカイシブカイ

入会および退会の手続きについて

■ 入会手続き

- ① 当会の HP にある入会申込書に必要事項を記入
- ② 申込先は会長宛て※とする（その後、担当幹事へ情報を共有）

■ 退会手続き

- ① 退会する旨、会長宛て※に連絡（その後、担当幹事へ情報を共有）
- 3 月は学生の方が卒業されるので、教員の方は特にご配慮お願いします。

※2017 年度は、吉成（rikusui-tokai@rikusui-tokai.sakura.ne.jp）まで

2018 年度「研究助成」の募集案内

次年度の研究助成を募集しております。水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他あらゆる探求の取り組みに対して特に小学、中学、高校の部活動を優先して採択しております。興味のある方は、静岡大学 戸田 (toda.mitsuo@shizuoka.ac.jp) までお問い合わせください。



アマチュア・若手研究者への調査・研究の奨励

2018年度 日本陸水学会 東海支部会



研究助成募集

小学、中学、高校の部活動などからの応募を優先して採択します

趣旨

日本陸水学会東海支部会では、「水辺環境を対象とした、生物・化学・地学・社会・地理・歴史・環境その他のあらゆる探求の取り組み」に対してアマチュア・若手研究者の調査・研究を奨励するために、以下のような研究助成を行います。

助成対象となる調査・研究の分野

陸水環境を対象とした自然科学・人文社会科学・環境教育の実践および教材研究など。

募集対象者

アマチュア・若手研究者および研究グループなど。

助成金額

申請上限5万円で5件以内の助成を行います。

※5万円分の予算まで申請可能ですが、申請内容に応じて減額して支給する場合があります。

被助成者の義務

調査・研究は年度内に終了し、その後1年以内に、当支部会研究発表会あるいは、支部会ニュースレター誌上での成果公表をしていただきます。

応募方法

以下の項目を含んだ申請書類 (A4版、手書き可、当支部会様式使用可) を作成してください。

- 1) 研究題目およびキーワード
 - 2) 申請者 (個人の氏名またはグループ名) と連絡先
 - 3) 調査・研究課題の内容 (1000-1200字程度)
 - 4) 助成金の支出予算案 (項目ごとに千円単位で)
例: 用品費 (備品、消耗品)、調査費 (成果発表のための学会・研究会参加旅費を含めても構いませんが、調査費以外は申請総額の1/2を超えないようにしてください)、謝金 (アルバイト代) など。※謝金については妥当性のないものは認められません
 - 5) 申請代表者の連絡先 (電子メール希望の場合はアドレス) 明記のこと
- ※様式は、 <http://rikusui-tokai.sakura.ne.jp/> からダウンロードできます

【注意】

- ・大学、研究機関に所属していない個人・グループ (小中高校の関係者など) を優先します
- ・大学、研究機関に所属する研究者、学生も応募できます
- ・大学 (院) 生の方は、卒業研究、修士・博士研究の一部内容について申請しても構いません
- ・営利を目的とする調査・研究に対しては助成を行いません
- ・当支部会会員でなくても応募できます
- ・応募、採択の機会に、ぜひ当支部会への入会をお願いします

応募締切

5月21日 (月)、(郵送の場合は消印有効)。

※下記まで郵送または電子メールでお申し込みください。

■ 応募・問い合わせ先

日本陸水学会 東海支部会 (研究助成担当)

〒432-8561 静岡県浜松市中区城北3-5-1

静岡大学 工学部 戸田三津夫 (宛)

E-mail: toda.mitsuo@shizuoka.ac.jp

（編集後記）

2017 年度最後のニュースレターになります。私が編集担当となってから、はや 1 年が経ってしまいました。2 月には東海支部研究発表会に初めて参加し、多くの学生や研究者の方々の研究の一端を伺うことができました。特に学生の発表は卒修論とは思えない緻密なデータと興味深い研究結果で、聞いていて非常に楽しかったです。自分の専門外の研究や解析を見ていると、普段は気づかない新たな視点からのアプローチが自分の研究にも使えるのではないかと研究への意欲があがります。

総会では、財政面での審議が多く、論文集も毎年度発行が厳しい情勢となっています。論文集発行や毎年度の発表会など今の活発な活動を今後も続けていくうえでも、会員数の拡大し維持していけるような広報を心がけたい次第です。また、Facebook の運用も総会では検討されました。今後は試験的に HP 情報との連動などから始める予定ですが、こういった SNS をきっかけにより多くの人に陸水学に興味をもってもらいたいですね。

次号は、おそらく 2017 年度の助成対象研究の報告書が載ることになると思われます。No. 77 で発表された計 4 件の高校で行われた研究結果になります。皆様ぜひご一読ください。次年度の募集もまだ受け付けております。特に、小学・中学・高校の部活動への支援を優先しておりますので、興味のある方はぜひご応募・ご周知ください。